◉南伊豆手石港発↓新島沖

周年狙える新島キンメ 春は期待度の高まる季節

本誌APC(東京)／椎名義徳 Yoshinori Shiina

サクラの開花に賑わう季節。淡いピンク色の花びらの舞いを見ているとキンメダイを思い浮かべてしまう釣り人は私だけではないだろう。

紺碧の海中からヒラヒラと舞い上がってくる銀色みがかったピンク色の魚体。その様相は深海の舞姫とも表現されるほどの美しさを感じさせてくれる。

▲新島沖のキンメは春の濁り潮が入る今後に期待が高まる

さてそのキンメダイ、周年狙える魚だが、これからの春シーズンは潮に濁りが入ることから、よい釣果に恵まれる確率が高くなる時期になる。

反応はバッチリ

年間を通してキンメ乗合で出船している南伊豆手石港の愛丸を訪れたのは3月10日のこと。当日の乗船者は4名。右舷並びでミヨシから山口さん、私、工藤さん、金子さんの配席となる。

氷が配られ準備OK。早朝4時20分にキンメ釣りのメッカ新島沖へと繰り出す。

キャビンの中でウトウトすることおよそ1時間。

「はい、着きましたから準備してください」とアナウンス。掛け枠仕掛けとオモリをセットし準備完了。

「反応あるねえ」と船長。魚探の画面には根の頂上付近にキンメの反応が映し出されており、投入開始が待ち遠しい。

東の空が明るみ始め、水平線上に利島、新島のシルエットが浮かんできたところでいよいよ投入開始となる。

「前からやりますよ。山口さんどうぞ」

山口さんの20本バリ仕掛けが7割ほど海中に引き込まれたところで、

「はい、椎名さんどうぞ」のアナウンス。2キロの鉄筋オモリを放り込む。

滞りなく4名の投入が完了したところで、

「350メートル。下って(深くなって)いきますよ。張って持ってて」

着底したところで糸フケを巻き取り、オモリが底を離れない程度に船の流れに合わせながら道糸を送り込んでいく、いわゆるゼロテンションの状態でアタリを待つ。

「きたよ!」

トモ側からアタリ到来の声が上がり、ほどなくして私の竿もガタガタと派手にたたかれ始めた。

それを見た船長は、

「潮が流れてないから、少しずつのばしていって」とアナウンス。

「前から上げましょう。山口さんどうぞ」、「椎名さんどうぞ」とミヨシから順に巻き上げの指示がかかる。

道糸を送り込んでいる間もアタリは途絶えることはなく、そして巻き上げを開始すると愛竿が大きく曲がり込む。これは期待できそうだ。

ミヨシの山口さんの巻き上げが止まると、ライン先の海中にはいくつものシルバーピンクの魚影。次つぎとまるでサクラ吹雪のように9枚のキンメが乱舞した。

「ちょっと小さいなあ」と謙遜する山口さん。新島沖のポテンシャルを知り尽くした常連さんならではの言葉だが、うらやましい限りの光景だ。

さあ、私の巻き上げも残り30メートルほど。ところがなんと、ここで突然ガンガンッとものすごい引きに襲われ道糸が引き出される。イルカの襲来だ。

ハイスピードで巻き上げるが、途中何度もアタックされ続け、やがて何事もなかったかのように竿が平穏になる。

仕掛けを回収すると一番下バリにイルカの食べ残しが1枚のみ。3番目の工藤さんもイルカに襲撃され全滅。大ドモの金子さんは辛うじて3枚取り込めたようだ。

これぞ新島サイズ

気を取り直しての2流し目は水深360メートル。1流し目ほどの賑やかさはないが、ガタガタとしたキンメのアタリが竿をたたき出した。

巻き上げにかかると、竿が大きく絞り込まれて電動リールが唸りを上げる。根掛かりしているようだ。

オモリだけの根掛かりであればリールのパワーだけで捨て糸を簡単に切ることができるが、仕掛け途中からではそうは簡単にいかない。

いったんリールの巻き上げを止め、ドラグを締め込んでそのままにしておく。竿は大きく曲がり込んでいくが、船の流れに引っ張られ、やがて幹糸が切れてスーッと戻り上がる。

仕掛けが切れたところで再び巻き上げスイッチをオン。竿にはしっかり魚の抵抗が残っており、複数枚は掛かっているようだ。

イルカの襲撃にドキドキしながらの巻き上げだったが、被害に遭うこともなく4枚のキンメを取り込めた。

釣れ上がった4枚のうち2枚は1キロを超える新島沖のアベレージサイズ。食べてもこのサイズが一番おいしい。

先ほどイルカに襲撃されてしまった工藤さんも良型を2枚ゲットした。

4流し目、水深360～380メートルでは山口さん4枚、工藤さん1枚、金子さんが3枚のキンメを取り込むことができたが私は……。

その後の流しでは毎回だれかしらの竿にアタリはくるものの、サクラ吹雪が舞うような盛り上がりはなく8回の投入を終えた。

私の釣果は8枚(0.5～1.2キロ)。トップは山口さんで16枚。

イルカ被害での差もあるが、山口さんはアタリが出れば必ず多点掛けでキャッチ。そのときの潮の状況に対しての道糸の送り込み方によって釣果に大きく差が出るといわれている新島キンメ。私もまだまだ修業が足りないようだ。

「イルカが回り出すとキンメを取られちゃうだけでなく、反応も消えちゃうんだよね」と船長。

当日の釣果はちょっと残念だったが、翌日はイルカの出没もなく、トップは30枚以上と反応の濃さに比例した好釣果。魚影は濃いので、邪魔さえ入らなければ今後も期待できるだろう。

▲1キロ級が新島沖の平均サイズ

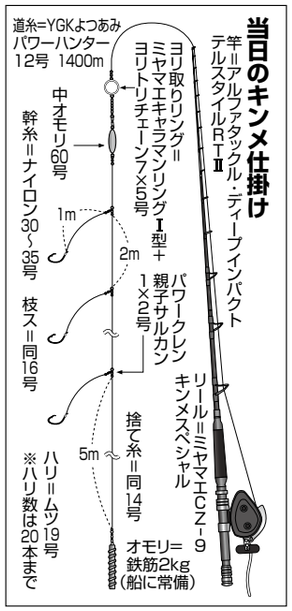
▲数はのびなかったがサイズは満足

•Tackle Guide

ひどいオマツリのときでも、ハリを見れば掛かっている魚がだれのものか区別できるよう、ハリのチモトをマジックでマーキングするなどしておくといい。

▲ハリに印をつけておくと分かりやすい

当日のキンメ仕掛け



◉船宿information

南伊豆手石港
愛丸
☎0558・62・1307
(詳細は巻末の情報欄参照)

佐野 譲船長

▶料金=新島沖キンメ乗合一人2万1000円(氷付き)
▶備考=フルレンタルセット3万1000円。別船生きイワシ泳がせのハタ五目も毎日受付

▲海況が穏やかになるこれからは釣りやすい時期

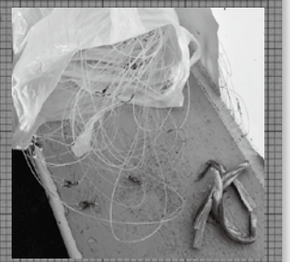
知っ得! Tips and Tricks

仕掛けを処分するときは

使い終わった仕掛けをなんの気なしに船に置いていく人は多いが、仕掛けの処分は船宿が産業廃棄物処理業者に委託して処分してもらっていることをご存じだろうか。

その際にかかる費用は1㎥(1×1×1メートル)あたり3万円前後。また、ハリに生エサが付いたままの状態では引き取ってもらえないため、そのような場合はお客さんが帰ったあと、船長がエサを外すといった一仕事が増えることになる。

不要になった仕掛けを船宿に処分してもらう場合は必ずハリに付いているエサを外し、不燃物と生ゴミを分別して託すことが最低限のマナーだ。

ちなみに私は不要仕掛けはなるべく持ち帰って解体分別。ハリとサルカン類は金属ゴミ、ハリスは不燃ゴミとして家庭ゴミで処分している。

▼分別のマナーを守ろう